

# そうぞう

2004.9 No. 10

## 「そうぞう」とは

人権尊重社会を実現するためには、様々な偏見や差別を受けている人の状況・気持ちを「想像」すること、豊かな人権文化を「創造」する必要があります。この情報誌がこれらの「そうぞう」につながるように——そんな思いが込められています。

## CONTENTS (もくじ)

### ほんとうの意味の「自立」、そして「自分らしく生きる」こと 2

映画監督 槇坪 夢鶴子さん

人権随想 「人権レーダー」の企画・取材を通して見えてきたもの  
今道 彰(毎日放送記者) 4

用語解説・紹介 5

人物紹介  
介護する人も受ける人も「納得のいく人生を」  
大阪後見支援センター所長 大國 美智子さん 6

人権相談Q&A  
シリーズ/草の根の取り組み  
ひとりひとりの顔が輝くろうあ運動をめざして  
草の根ろうあ者こんだん会(大阪市) 7

シリーズ/教材・カリキュラム紹介  
人権啓発(ビデオ) そっとしておけば…  
(社)部落解放・人権研究所 啓発企画室 8

シリーズ/自尊心と暴力を考える ②  
自尊心暴力理論 ~人に向かう暴力の場合~  
金 香百合(HEAL・ホリスティック教育実践研究所所長) 9

ご案内/全国一斉「女性の人権ホットライン」開設  
がんばってます!/NPO紹介  
ニッポン・アクティブライフ・クラブ(サルク) 10

ご案内/おおさかヒューマンフェスタ2004inまっぼる  
いのち~「たったひとつのたからもの」~

おしらせ/市町村事業 11

まちを歩く/人権のかおりを求めて  
【第6回】空城商店街界限 12

人権啓発詩/戦争

2004年は  
「人権教育のための国連10年」の  
最終年です!

映画監督の槇坪夢鶴子さん



# ほんとうの意味の「自立」、 そして「自分らしく生きる」こと

映画監督 まきつぼたつこ  
槇坪多鶴子さん



「人権」の基本は、一人ひとりが個性や能力をいかしながら、正直に「自分らしく生きる」ことです。今回は、関節リウマチのため車いすでメガホンをとり、「いのち、愛、共生」をテーマに映画製作に取り組まれている映画監督の槇坪多鶴子さんにお話をお聴きました。

## 自分の居場所を求めて

私は広島で生まれ、原爆が落ちた時は5歳でした。やがて、終戦を迎え戦地から復員した父は、なぜか故郷の広島には帰ってこず、私は母と2人で父の故郷に身を寄せることになってしまいました。そのころの私は、子ども心に「しっかりしなくては。母に心配をかけてはいけない」と常に言い聞かせていました。母に甘えた記憶はありません。小学校時代は、体も健康で、勉強も、遊ぶことも好き。クラスのリーダー的存在で、「芯の強い、いい子」と友だちや先生から、慕われ、頼られる存在でした。

小学校4年生の時に、大阪にいた父のもとに移りましたが、一家団らの思い出はほとんどありません。父はお酒が入ると時々、家の中で暴れることもありましたが、両親が離婚したのは中学の時でしたが、世間体とか経済的理由から私が大学に入って家をでるまで、同居を続けたのです。

そんな家庭でしたから、とにかく家にいたくないわけです。クラブ活動が終わっても家に帰らず図書室に行き、そこが閉まる夜遅くまで学校にいました。

演劇とのかかわりは、小学生からで、演出から主演までやったこともあります。演劇のおもしろさに目覚めたのもそのころで、中学、高校とずっと演劇は続けていました。

ところが、学校にいる間は友達とかクラブとか、結構楽しいのですが、ひとりになると、どうしても家のこと親のことを考えて暗くなる。そういう時は、淀川の川べりをひたすら走っていました。そんなわけで、家には毎日くたくたになって帰ってきて、食べて、寝るだけの生活でしたね。

学校のない夏休みや冬休みには、広島の親戚の家を転々としていました。それも長くいると迷惑だから、3~4日だけお世話になるというわけです。常に回りに配慮し気遣う、「大人のような子ども」だったように思います。今振り返ると、家庭に「居場所」がないぶん、どこかに自分の「居場所」を探していたのだと思います。

そして、当時はお医者さんが足りないということもあり、「人間にとって最も大切な「いのち」をあずかる医者になって多くの人のいのちを救いたい」と考えるようにもなりました。

小さいときから、家の外で友達や先生に喜ばれたり、頼りにされることが、私の「居場所」でしたから…「人の役にたち、感謝される医者」になることが、自分の「居場所」になると感じていたのかもしれない。

## 演劇仲間との結婚・別離 ~心も体もボロボロに~

医者になるために、高校卒業後、家を出てアルバイトをしながら勉強をしようと考えていたのですが、現実にはかなり無理だということがわかってきて、結局、医学部をあきらめました。

その時は、「いのちを救う医者」を目指していた私が「死」も考えたほど落ち込みました。でも、死ねなかった。なぜかという私たちは、戦後の混乱期に、とにかく生きることがすべてでしたから…自ら死を選ぶことは基本的に考えられない世代なんですね。

悩んだあげく、小学生から高校まで続けていた演劇に自分の行き場所を見つけ、急遽、演劇部のある東京の大学を受験、入学することができました。

大学1年の時に演劇仲間と結婚して、4年の時に出産しました。卒業後は夫の実家の家業を切り盛りする生活になりましたが、夫は演劇ばかりで家庭をかえりみない人でした。

夫の両親からは「いい嫁がきてくれた」と、ずいぶん気に入られました。小さい時から「人に嫌われない、いい子」でしたから「嫌われないように…」と寝る時間を削って、子育てに家業に必死に頑張る。そんな生き方が心と体のストレスになったのでしょうか、結局身体をこわし、家を飛び出す形で離婚、子どもとも離ればなれになってしまいました。

## やっとわかった ほんとうの意味の「自立」

離婚後の身の振り方について、大学時代に親交のあったある俳優さんに相談したところ、「自立しなさい」と言われました。ところが、「自立」の意味がわからない。

「自分のことは自分でする」、あるいは「働いてお金をもらう」ということが社会的な自立ということはわかるわけです。

それまで、私は進路を決めるときも結婚のときも、親に相談せず自分で決めてきました。そのことの責任は負わなければならない、というぐらいのことはわかっていましたが、自分の生き方を振り返ってみて、はじめて、人との関りの中で支えあう「自立」もあるということに気づきました。

結婚生活の中で「嫌なこともイヤ」と言えずに病気になった私。夫との関係でも「人を好きになるのは、尽くすこと」だと思っていました。自分ひとりで、なんでも抱え込んで、自分を理解してもらうことも、相手を理解することもなく、ひたすら「いい子」を貫こうとしていたように思います。

そうではなくて、自分にできないことや悩みがあれば、助けを求めたり、相談できる「人間関係」があってこそ「自立」していける。その一番身近にあるのが親であり、夫、家族で…必要なときに支えあえる関係が大切なのです。

離婚、子どもとの別れを経験したことで、「愛」というのは「お互いを理解しあう」ということから始まり、「育てあい、共に生きる(共生)」こと、そして…その延長線上に本当の意味での、人としての「自立」があるということが、やっとわかってきたわけです。

## 伝えたい「命の重さ」

その後、ある映画社で映画のさまざまな記録を担当するスクリプターとして18年の間、差別や偏見の問題、老人問題、思春期やいじめの問題など、いろんなテーマにかかわりました。そしてしだいに「差別してはいけない」、「いじめてはいけない」ということを、心からわかってもらうためにはどうすればいいのか、ということを考えるようになりました。

そんな時、アイドルといわれた少女歌手の飛び降り自殺があり、その後連鎖的に数人の少女が自殺をする事件やいじめが原因の自殺が全国で相次いで起こりました。

自分のことを考えても、10代のころは、冷静に大人の行動を見ている反面、デリケートな傷つきやすい心を抱えている、そんな感性の豊かな時期だったと思うのです。そんな子どもたちが、いとも簡単に生きることをやめてしまう。若い頃自殺を考えた私にとって胸の痛む事件が続きました。

その頃、再婚して、小学生の息子がいたこともあって、こういう時こそ、子どもたちに「いのちの重さ」を伝えたい、伝えなければならない、と強く思いました。

その思いの第一歩として、1985年に映画の企画制作会社を設立しました。翌年から93年までの間に～いのちと愛のメッセージ～「子どもたちへ」「若人よ」「地球っ子」という3作を、98年には、HIV・援助交際・薬物問題を盛り

込んだ「わたしがSuKi」を製作・監督しました。

例えば、映画の中には出産シーンがあります。それは、みんな自分の意志で生まれてくるんだということを知ってもらうためです。子どもたちにとって生まれる側で映画を見ることで、「自分のいのちを大切にしよう」と思うと同時に、「自分以外の人も同じように生まれてきたんだ」と気づくことで「他人のいのち」も大事にするようになると思うのです。

「いのちの誕生」を伝える「性教育」は「いのちを見つめる教育・共に生きることの大切さを伝える教育」であり、それは人権教育にもつながると考えています。子どもたちには、性を正しく見つめ、いのちの大切さを知り、自分を好きになってほしいと願っています。



映画「母のいる場所」の場面

## 介護する人、される人～それぞれの自立～

この数年は、家族と介護の問題やお年寄りの自立のありよう、成長を描いた「老親 ろうしん」(用語解説参照)「母のいる場所」(用語解説参照)を製作しました。

この二つの作品はどちらも原作者の実体験がもとになっているのですが、私自身も関節リウマチで車椅子の生活ながら、介護が必要な痴呆症の母と暮らしています。その母が、映画の撮影の時には私の車椅子を押してくれています。母は、一方的に介護される側になるのではなく、娘を手助けしていることで輝いているようです。そういう実体験からも「介護の原点は対等な人間関係のふれあいにあるのでは…」と思っています。

介護する人、される人がかかわりあいながら、それぞれが自立して自分らしく生きていける。幸せだなんて思える。そういうことが大事だと実感しています。

介護と子育てはどこか似ています。自分に余裕がないと、自分が幸せじゃないと、より弱い立場の方にはけ口を求めがちになり、虐待などを引き起こすのではないのでしょうか。介護も子育ても自分だけで頑張らないで、できないことは家族だけでなく、公的支援などにもSOSを送ることも必要です。

介護(子育て)する人、介護(子育て)される人の人権を保障し、その人らしく生きるために何が大切なのか?映画を見た人が介護を自分たちの問題としてとらえ、生き方、老い方について話し合っていたらキッカケになればと思っています。

## 「人権レーダー」の企画・取材を通して見えてきたもの

いまみち あきら  
今道 彰 (株) 毎日放送 ラジオ局報道部記者



「こんな人生、二度と要らん」

68歳の女性は、インタビューの最後をこう締めくくった。それまで明るい口調だったのが、この時ばかりは語気が強くなった。

彼女は被差別部落の出身。「半生を聞かせて欲しい」と何度かお願いした末、やっとインタビューに応じてくれ、貧しさを極めた少女時代や、教師にまで差別された小学校での日々。生活苦に耐えられず母親に浴びせた心無い言葉への後悔など、多くの辛い体験をまるで笑い飛ばすかのように語ってくれた。

現在は小学校の給食調理員として働き、子ども達との交流を楽しんでいるという。

彼女の話聞きながら私は心の中で「人生捨てたものじゃない、なんて今は思っているのかな」と分析していた。

そこに、彼女の最後の言葉が鋭く突き刺さってきた。傷ついた心は、簡単には癒えない。言葉が見つからなかった私は、ただ苦笑するしかなかった。

ラジオ番組「人権レーダー」の、取材の1コマである。

### 本音で語り合う

「人権レーダー」は、毎日放送ラジオの夕方4時から番組「MBSニュースワイド・アングル」の中にある10分間のコーナーだ。大阪府など近畿の自治体による提供で95年に始まり、今年で10年目、放送

回数は1100回を超えた。内容を一言でいえば、人権に関する問題について取材し、録音したインタビューを流しながら問題点などを報告するというもの。差別に苦しむ当事者をスタジオに招いて生で話を聞くこともある。

コーナーがスタートする時、私は「人権って、なんか面倒だなあ」と腰が引けていた。しかし、以前に人権関連のイベントなどを取材した経験を思い出し、「なんとかなるだろう」と安易に担当を引き受けたのだ。が、3回目の取材でその甘さを思い知る。

知的障害児の施設でのこと、子どもたちを前にしておじけづいてしまい、取材ができなかった。潜んでいた差別心が一気に噴き出した瞬間だった。

その後の取材でも、かつて自分が伝えていた、うわべだけの人権とはかけ離れた現実が幾つもあった。冒頭で紹介した女性のこともその1例だ。私は自分の浅はかさに呆れ、自信を失っていった。

そんなある日、人権活動をしている人が私にこう言った。

「人間って他人を傷つけるし差別もする、私もそう、そういう弱い存在なんや、それを認めた上で人権を語らないと意味が無い、お互い本音で語り合おう。」この言葉を聞いて、肩の力がスッと抜ける感じがした。厳しい体験で、人間のいい面も悪い面も知り尽くしたがゆえの包容力だろうか、こんな私を有りのままに受け入れてくれる雰囲気、そこにはあった。この時、「本音で語り合える、こんな場所がもっとあればいいな」と切実に感じた。

### 「知る」ことは、体感すること

人権関連の取材では、「まず当事者のことを知ることが大切」だとよく聞く。人権レーダーを通じて多く

の人と出会ううち、「知る」というのは、知識を得ることではなく、体感することだと感じた。

実際に会って話を聞くと、言葉の裏の思いが伝わってくるのが少なくない。特にここ数年、子ども達の取材をする機会が多くなって、より、そのことを実感している。

虐待されても必死で親をかばう小学生。

高校に入学したものの、被差別部落出身であることがバレないかと怯える女子生徒。

父親のリストラが原因で崩壊寸前となった夫婦仲をなんとか繋ぎとめようと頑張る子ども。

彼らの本当の気持ちは、彼らに接してみないと分からない。

社会のゆがみを必死で受け止めようとしているその姿は、正義感のない私でさえ、早く何とかしなければと思う。

## 人権を考えるのは自分のため

「人権って、何のために考えなあかんの？」

人権リーダーが始まった頃は、心の奥でよく自問していた。しかし今ならこう答える、「自分のため」。

ストレスがたまった現在の社会では、思いも寄らないことで理不尽な扱いを受けることもある。

そんな世界は、常に緊張していなければならない。

そうではなくて、自分の弱いところをさらけ出しながら本音で語れる環境……他の人と違う所があっても互いに認め合える環境がいっぱいあれば、思いっきり深呼吸して生きていけるのではないか。

自分や我が子が将来、半生を振り返るときに、「こんな人生、二度と<sup>い</sup>要らん」なんて思うことのないよう、人権リーダーはこれからも続けていきたい。

## 用語解説

### 【槇坪 多鶴子（まきつぼ・たづこ）さん】

映画監督・企画制作パオ（有）代表取締役

2000年公開の「老親 ろうしん」が全国的に話題を呼びました。リウマチのため車いすでメガホンをとって、車いすを押すのは、自身の老親、87歳のしかも痴呆症の母親。介護しあう母子の姿がそこにはあります。自身の体験も重ね合わせた「母のいる場所」（2003年度作品）は、現在、各地で上映会が開かれ、介護の選択と家族それぞれの自立を考える話題作として、反響を呼んでいます。

パオHP >> <http://www.pao-jp.com/>

### 【老親 ろうしん】

～女が結婚するとふつう親が4人になる～

「介護で力尽きる前に自分を生きたい。」

「老いるとは、新しい自分に出会い続けること…」

老親介護の生活を描く中で、性別役割分担や女性の生き方を問い直して高齢者の自立を見つめています。オトノサマで生きてきた舅が、妻の死後、一家の主夫に大変身。元嫁母子を支える生活に生きがいを見出ししていきます。孫娘の「おじいちゃんはゆっくり成長するタイプ」という発想は介護の問題に悩む主人公の生き方をユーモラスに描いています。

### 【母のいる場所】

～母の介護をめぐる起こる主人公と父親の葛藤～

「酒、タバコ、外泊、恋愛の自由」が保障されている老人ホームとの出会い。

母は笑顔を取り戻し、そこが「母の居場所」に…

人は誰でも老いを迎え、病気や障害を抱えたり、不安と孤独から痴呆になったりする可能性があります。介護する人される人、それぞれの自立とは？ 介護とは？ ふさわしい最後の居場所はどこなのか？ 夫婦のあり方や親子関係を見つめ直すきっかけになる作品です。

### 【人権リーダー】

近畿の自治体が広域的・効果的な人権啓発のために提供している啓発ラジオ番組です。

毎週金曜日の夕刻、毎日放送の「MBSニュースワイド アングル」の中のコーナーで、さまざまな人権問題をテーマにタイムリーで身近な話題をわかりやすく語りかけています。

毎回リスナーからの反響が数多く寄せられています。シリーズ「私の人権体験記」と題してエッセイを募集した際には、幅広い年齢層の方からの応募が多数あり、近畿における広域的な人権啓発番組として定着しています。

## 人物紹介

### 介護する人も受ける人も 「納得のいく人生を」



大阪後見支援センター  
所長 おおくに 大國 みちこ 美智子さん

2000年より介護保険がスタートして以来、痴呆のある高齢者や知的、あるいは精神障害を持つ人の財産管理をはじめとする権利擁護を行う事業や制度が相次いで立ち上がった。

20数年前、寝たきりの高齢者を保健師と一緒に訪問する中で痴呆にまつわる様々な問題に直面した。中でも、財産に関する問題は深刻だった。「お年寄りを家族がまもるとい時代は終わった。これからは社会によってまもられなくてはならない時代がくる」という予感があった。

「面倒を見るから」と親のお金を管理していた娘が、痴呆が出たとたんにお金を持って行方をくらませてしまい、世話をする人もお金もない高齢者が一人取り残されてしまう。年々、切実な声が多くあがってくるようになり、全国に先駆けて1997年に大阪後見支援センター「あいあいねっと」が開設された。

自身これまでに1万件を超える相談を受けてきた。軟便が出た寝たきりの妻に、「いつも便秘で苦しいのに今日はよかったなあ」と声をかけながら、下の世話をする夫。重度心身障害のある息子を腰を痛めながらも笑顔で30年以上も世話してきた母親。「介護の大変さはよくわかりますが、それ以上にこんなすばらしい場面を見てきました」と目を細める。

「そんな優しい気持ちを持つ人たちが社会的プレッシャーを抱えず、ときとして財産侵害や虐待という形が出てくるのではないのでしょうか。プレッシャーをやわらげる制度があれば、きっと優しい気持ちも取り戻せるはず」と人間の持つ優しさを信じる。

「これからの介護は家族の愛情と社会的支援のバランスが大切です。介護する人も受ける人も『納得のいく人生』を送れるよう、制度の充実と人材の育成に力を尽くしていきたいと考えています」。見据える目が輝いた。



#### 人権相談

人権相談に関する  
質問と回答をご紹介します。

**Q** 70歳の女性です。息子から「一生面倒みてやるから、年金などを寄せせ」と迫られています。法的な対抗手段が知りたいのですが、どこに相談すればよいのでしょうか。

**A** 電話相談を受けた相談員は相談者の話の状況から、相談者は子どもによる財産侵害を受けている可能性があるかと捉え、次回の相談日を案内したところ、緊急を要するとのことだったので、専門的な助言ができる機関として、大阪府高齢者総合

相談情報センターや市町村の住民相談、大阪弁護士会等を案内しました。

さらに、相談員は相談者に対して、ただ財産保全をしたところで息子との関係のあり方はこれまでと違ってくることになるので、これを機会に親子関係の見直しを試みることを助言しました。

・大阪府高齢者総合相談情報センター  
(シルバー110番)  
吹田市山田北3-1 府立老人総合センター内  
TEL06-6876-0031

(財)大阪府人権協会 人権相談窓口  
月曜～金曜 10:00～17:00  
TEL : 06-6562-4040

# HUMAN RIGHTS

## ひとりひとりの顔が輝くろうあ運動をめざして

### 草の根ろうあ者こんだん会（大阪市）

#### ●みんなで力いっぱいがんばった20年！

『草の根ろうあ者こんだん会』は、1984年に大阪で結成された団体です。ろう者と聴者がそれぞれの立場を尊重しつつ、ろう者大衆の自立と生活向上・権利拡大をめざして共に様々な運動を進めてきました。

団体名についてですが、「草の根」というのは“多くの、ひとりひとりの”という意味で使っています。“多くのひとりひとりのろう者が中心になった団体”ということです。この20年間、私たちは生活相談・手話セミナー・手話通訳派遣・こんだん会・手話劇などの文化活動・レクレーション・月刊誌の発行・書籍出版などの活動を地道に行ってきました。どの活動も、単なる成果主義に陥らず、「ひとりひとりの自主性と主体性」を大切にしています。つまり、私たちは活動を進める中で、ろう者がひとりひとり、自主性・自己主張する力・生きる力・差別とたたかう力を高めていくことを目標としています。そして、活動の中で培った力を日常の生活や労働の場でも活かし、ろう者に対する差別を許さず、ろう者であることを誇りに生きていってほしいと願っています。

#### ●ろう者の生きる場・働く場『デフ・ワークス』も運営

1997年には、あの阪神淡路大震災での被災経験を教訓として、『デフ・ワークス』というろう者自立の拠点を多くの人たちの支援を受けて立ちあげました。阪神淡路大震災では多くのろう者が生



中の島まつりなどの市民イベントにも参加



ろう者の手話を広める手話セミナー

きるための必要な情報から疎外され、ろう者に対するバリアフリーの著しい遅れが明らかになりました。また、きめ細かな生活支援（サポート）の必要性も高まってきました。ですから、『デフ・ワークス』は（作業所としての）作業だけでなく、学びの講座の開催や生活相談、情報提供なども行い、「ろう者自立支援センター」とでもいうべき場となっています。所内の設備もろう者のバリアフリーを考えたものとなっています。ぜひ見学にお越しください。事前に連絡をお願いします。

#### ●来年3月に『デフ・ピープル・フェア』を開催

私たちは今年で結成20周年を迎えますが、これを記念して来年3月5日・6日の二日間、大阪府中央区の「ヴィアール大阪」にて『デフ・ピープル・フェア』というイベントを開催します。本会以外にもいろんな運動を展開して頑張っているろう者の団体が数多くあります。これらの団体にブースを提供し、自分たちの取り組みを発信していただくというものです。入場無料のフリーでオープンなイベントですので、皆さまのご来場をお待ちしています。ろう者の世界を見てくださいか？ 手話ができなくても大歓迎です。

草の根ろうあ者こんだん会

TEL 06-6711-2330 FAX 06-6711-2331

<http://www.5d.biglobe.ne.jp/~deafnet/>

人権啓発〔ビデオ〕

## 『そっとしておけば…』

シリーズ

教材・カリキュラム  
紹介

生まれたばかりの赤ちゃんは、  
部落差別の存在を知らず差別する  
ことありません。

「そっとしておけば、自然と差別はなくなる」という意見に思わずうなずいてしまいそうになりますが、そこに重大な落とし穴が…

# 寝た子を 起こすな という考え方



★学歴や性教育のこと…



★在日韓国・朝鮮人のこと…



★お弁当を隠して食べたこと…

## ドラマ部 ストーリー



★どうしても、話せないこと…



★日本名で働いていること…



★部落差別のこと…

「寝た子を起こすな」論は部落差別の解決にとって、古くて新しい課題です。

このビデオは、参加者が考えること、話し合うことを大切にしたい人権研修やワークショップでの活用に最適な教材です。

〈活用の一例〉

- ① 参加者がビデオの前半の問題提起部分を見た後、「寝た子を起こすな」ということについてロールプレイします。例えば、住んでいる場所や生き立ちについて、人には話したくないという前提をつくり、詳しく聞いてくる相手役に対してどうふるまうかを参加者が演じます。ロールプレイを通して、自らの体験や差別意識の芽生え、そして「隠して生きる」とはどんなことなのかを感じ、隣り合った参加者と話し合ってもらいます。
- ② その後、ビデオの後半の解説部分を上映。「寝た子を起こすな」という考え方の問題点、差別をなくすための道筋について参加者全員で考えることのできる教材です。

〈ビデオの概要〉 VHS 36分

- ・第1部 ドラマ構成による問題提起（約26分）
- ・第2部 CGと資料を使った解説（約10分）

# 自尊感情暴力理論 ～人に向かう暴力の場合～

金 香百合 (HEAL・ホリスティック教育実践研究所所長)

前回は人が生き生きと生きるために必要な自尊感情(セルフエスティーム)のことを紹介しました。自尊感情が高くなると差別や偏見も少なくなり人権感覚が豊かになります。そのためにはからだの栄養とこころの栄養のふたつが必要でした。栄養が十分に足りていると人間はエンパワーします。エンパワーとは、人間に内在するさまざまな可能性が、人や社会とのつながりの中で、次々と芽生え、花咲いている状態です。パワーが内から湧いてでる状態ともいえます。これが自尊感情栄養理論でした。

さて、その一方で、栄養が不足するとどういことがおこるのでしょうか。人間は誰でもすばらしい可能性と同時に暴力性をももつ存在です。栄養不足が著しくなるとこの暴力性がでてきます。もちろん、人間の暴力性は栄養が足りている時にはあまり出てきません。栄養がもっとも奪われる厳しい状況のひとつは戦争と軍隊です。家ではどんなにやさしかったおとうさんもおにいさんもそこではどんどん暴力的にならざるをえないのです。さらに、今の日本社会のあちらこちらで戦争状況と似たようなことが起っているのです。すなわち、家庭や職場や地域で極度の栄養不足が常態化していて、そこからさまざまな暴力がおこっています。暴力は①人(外)に向かうもの②自分(内)に向かうものがあります。今回はまず、人に向かう暴力をみていきましょう。

- ① 肉体的暴力・・・人をたたく、殴る、蹴る、こづく、つねる、首をしめる、殺す。人に向かう前に物に向かうときもある。たとえば、物を蹴る、キズつける、破壊する。など②言葉の暴力・・・大声でどなる。攻撃的、威嚇的、支配的、命令的、否定的なものい。

差別的な発言。など③精神的暴力・・・無視する、にらみつける、目を合わせない、仲間はずれ、かげ口をいう、無言電話、ストーカー行為。など④性暴力・・・セクハラ、性犯罪、痴漢行為、レイプ、買春。など⑤経済的暴力・・・経済的自由を与えない。働くことを阻害する。誰に養ってもらっているのかと脅す。など⑥社会的暴力・・・家族や友人との関係を遮断して孤立させる、など――。

このように、暴力とは肉体的なものはもちろん、それ以外にもたくさんあります。ではどのように人間は暴力を選択するのでしょうか。暴力の選択に大きな影響を与えるのは「暴力情報」です。われわれは自分自身のこれまでの生活の中で見聞きし体験してきた暴力の情報をもっています。加えてメディアの中に溢れている暴力によって多くの暴力情報をもっています。栄養不足の時にそうした情報を悪用してしまうことがおこります。これまでにのべてきたような暴力が小さなレベルでは私たちの周囲で多発しています。

そしてすでに大きなレベルでの暴力事件までもが全国各地であい次いでいます。私はそれらの被害者の心身の傷の大きさや深さを考えると胸がしめつけられる思いです。その一方で加害者がここまで栄養不足のまま追い詰められていった状況を思い絶望的になります。

でも、だからこそ、すべての人に栄養がしっかりゆきわたり合うような人間関係や社会システムをつくっていくことをしなくてはいけないのだと痛感します。それが「人権の文化」を築くことだと確信しています。来年一月にセルフエスティーム研究会を開催します。詳細は私のホームページで。

<http://homepage3.nifty.com/kimrin/>



## 全国一斉「女性の人権ホットライン」開設

人権擁護委員は、夫・パートナーからの暴力や職場等におけるセクシャル・ハラスメント、ストーカー行為といった女性をめぐる各種の人権問題に積極的に取り組んでいます。

その一環として、「女性の人権ホットライン」を開設して相談に応じてきましたが、今回「女性に対する暴力をなくす運動」期間中(11月12日～25日まで)、全国一斉相談日を開設し専門の相談員がご相談をお受けします。一人で悩まずにお気軽に電話をおかけください。



「人権イメージキャラクター  
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん」

- 日時** 11月21日(日)  
午前10時から午後5時まで
- 電話番号** 女性の人権ホットライン電話番号  
06-6942-1238
- 相談員** 大阪府人権擁護委員会連合会の人権擁護委員  
(女性の人権問題に詳しい人権擁護委員が  
担当します。)





# 助け合いを柱に、全国的に活動を展開

特定非営利活動法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ(ナルク)

「自立」「奉仕」「助け合い」をモットーに社会参加と市民相互扶助の精神に基づいて、高齢社会にふさわしい地域社会づくり推進に関する事業を行いながら、社会全体の利益と福祉の増進に寄与することを目的としています。

1994年4月にWACアクティブクラブとして設立し、1998年5月にニッポン・アクティブライフ・クラブに改称。北は北海道から南は鹿児島まで106の拠点を持つなど、全国ネットで活動を展開しています。会員は約2万人を数えます。

主な活動としては、▽経験、特技、能力を活かした社会貢献活動及び高齢者の支援や介護・介助サービス▽少子化対策としての子育て支援▽社会参加、ボランティア活動への積極的参加とその普及▽長寿社会におけるコミュニケーションのあるまちづくり、地域づくりへの協力や自治体などに対しての地域政策提言▽長寿社会の活性化と中高年の健康づくり、社会参加及びその社会的地位の向上のための取り組み▽必要な調査研究、情報収集や提供、啓発の普及や研修 ― などの事業を実施しています。

特徴的なノウハウとして、時間預託システムがあります。会員相互の助け合いボランティア活動で、サービスを提供した時間を1時間1点として団体に時間預託(貯金)しておき、自分がサービスを必要

になったとき預託した点数を引き出し、全国の拠点のあるところではどこでも無料でサービスを受けられる制度です。庭の手入れ、住宅の修繕、通院等の送迎、家事援助、話し相手、介助・介護など、活動の内容も多彩です。

高畑敬一会長は「これからも、ボランティアによる双方向の助け合いを柱として、時間預託システムの定着を図りながら、全国的に活動を充実・発展させていきたいと考えています」と話しています。



事務所で活動する会員のみなさん

〒540-0028  
大阪市中央区常磐町2-1-8 親和ビル4階  
TEL 06-6941-5448 FAX 06-6941-5130  
<http://nalc.jp>  
E-mail : [info@nalc.jp](mailto:info@nalc.jp)

そぞろ

10

2004.9\*No.10



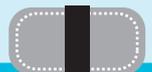
## おおさかヒューマンフェスタ2004 in まつばら いのち ～「たったひとつのたからもの」～

生命保険会社のテレビCMで話題になり、昨年出版されたフォトエッセイ「たったひとつのたからもの」。重度の心臓病で生後まもなく余命1年と診断された秋雪君の6年2ヶ月の記録。この本の朗読と写真の映写、ピアノ演奏を通して、いのちの大切さ、生きるということ、共に感じ、考えたいと思います。参加費は無料です(ただし事前申込が必要)。皆さんの参加をお待ちしています。

**日時** 12月4日(土)午後2時～4時  
**会場** 松原市文化会館  
松原市田井城1-3-11  
(近鉄南大阪線「河内松原」駅下車約700m)

**内容** 「たったひとつのたからもの」(著者:加藤浩美さん、発行:文芸春秋)の朗読と写真の映写、ピアノ演奏で綴るひととき  
・朗読は俳優の本上まなみさん  
・演奏はピアニストの村松健さん

**問合せ** (財)大阪府人権協会人権啓発部  
TEL 06-6568-2983





参加してください!!

### 高槻市関係事業

#### 人権バスツアー

日時	11月5日(金) 午前8時30分(市役所東側集合)
行先	和歌山県立博物館 紀伊風土記の丘
定員	120人
参加費	2000円(昼食代・入館料等)
問合せ	高槻市市民協働部 人権室 TEL 072-674-7458 FAX 072-674-7577

### 吹田市関係事業

#### 市民ひゅーまんセミナー

日時	10月5日(火) 午後2~4時
内容	テーマ:ハンセン病と人権 講師:堀井 隆水さん(武庫川女子大学教授) テーマ:わたしの体験談 講師:川島 保さん(社会復帰者)

日時	10月18日(月) 午後2時~4時
内容	テーマ:部落問題の現状と課題 ~部落差別の現実に学ぶこと 講師:住田 一郎さん(関西大学非常勤講師)

日時	10月21日(木) 午後2時~4時
内容	テーマ:セクシュアルマイノリティの人権 ~不完全フルタイム トランスジェンダーとして 講師:土肥 いつきさん (京都府立高校教員・セクシュアルマイノリティ教員 ネットワーク副代表)

日時	10月26日(火) 午後2時~4時
内容	テーマ:共に生きる明日をめざして 講師:藤野 高明さん (全日本視覚障害者協議会相談役)
場所	上記のいずれも吹田市文化会館(メイシアター) 小ホール

#### 2004年人権フェスティバル~人権教育のための国連10年 地域から心をつなぐ 人権の輪

日時	12月5日(日) 午後1時30分~3時20分
内容	バリアフリーコンサート「心のあけぼの」 出演:チームアウローラ(音大卒の障害者プロ集団)
その他	入場無料。手話通訳がつかます。
会場	吹田市文化会館(メイシアター) 中ホール
問合せ	吹田市人権部人権室 TEL 06-6384-1231 FAX 06-6368-7345



### 大東市関係事業

#### 秋のバスツアー

日時	10月27日(水)
内容	作家の水上勉さんにもつわる品々などを展示している「若州一滴文庫」などを見学。「人間平等」の精神などを学びます。
問合せ	ヒューネットだいたう(啓発推進課) TEL 072-870-9062 FAX 072-870-0907

#### 「差別撤廃・人権擁護都市宣言」強調月間 男女共同参画フォーラム

日時	11月26日(金) 午後7時~
内容	テーマ:女と男とのもっといい関係 講師:辛 淑玉さん
入場料	無料(整理券必要)
問合せ	大東市人権推進部人権政策室 TEL 072-870-9665 FAX 072-875-3018

### 東大阪市関係事業

#### 人権週間事業

##### (1) 平和と人権のつどい

日時	12月4日(土) 午後1時30分~午後3時30分
内容	第1部 式典 第2部 講師:カーリー西條(料理研究家) テーマ:日本の常識・非常識(予定)
場所	東大阪市立男女共同参画センターホール

##### (2) 平和と人権展および識字展

日時	12月10日(金)~12日(日) 午前9時30分~午後4時30分(12日は午後4時まで)
内容	市内小・中学生の人権作品(絵画・ポスター・書写等)の展示及び識字関連パネル展示
場所	東大阪市立児童文化スポーツセンター (ドリーム21)多目的ホール
問合せ	東大阪市人権文化部 人権啓発課 TEL 06-4309-3156 FAX 06-4309-3823

### 堺市関係事業

#### 人権を守る市民のつどい

日時	12月1日(水) 午後1時30分~4時10分
内容	第1部 わたしからの人権メッセージ 国際青年年記念堺連絡会海外派遣団活動報告 第2部 講演:生きやすい生き方 講師:美輪 明宏さん(シャンソン歌手・俳優)
場所	堺市民会館大ホール
入場料	無料(ただし、申込みが必要)
申込み	11月1日(月)~12日(金)の期間受付。はがき・電話・FAXで堺市人権教育推進協議会(〒590-0078 堺市南瓦町3-1 堺市人権推進課内)へ。
定員	1000人。応募者多数の場合抽選(当選者のみ通知)
問合せ	堺市人権教育推進協議会 TEL 072-228-7420 FAX 072-228-8070

そうぞう

11

2004.9\*No.10

# まちを歩

人権の  
かおりを求めて

第6回

## 大阪市中央区 からほり 空堀商店街界限



空堀商店街界限は戦災を逃れた関係から、昔ながらのまち並みが残っている。アーケードの商店街のにぎわいから、一步路地や横道に入ると石畳や石段の道、稲荷や地藏堂、長屋、銭湯…、日々の生活の風情が色濃く映り、心をなごませる。どことなく懐かしい風景は、人と人が言葉を交わし、ふれあい、つながっていく、そんなぬくもりをかもし出す。



高齢化率約20パーセント。商店街界限には高齢者、とりわけ一人暮らしの人が多く住む。そんな特徴を踏まえて、特定非営利活動法人「高齢者外出介助の会」は、「外出の手伝いを通して、お年寄りの皆さんに、より楽しく充実した日常生活をおくってもらおう」と、20歳代～80歳代までの約60人の会員が集い、地域に根ざしたボランティア活動を続けている。

具体的な取り組みとしては、高齢者の外出介助にとどまらず、高齢者やその家族を対象としたコンサートをはじめ、春と秋の遠足、電動車いすの貸し出し、介護保険外支援、生きがいづくり講座、入院支援—など多様で、さらに活動の輪が広がりをみせている。また、商店街の活性化にも協力しており、その一つとして、「からほり新聞」を発行。「まち情報」の発信にも努めている。

その活動の拠点となっているのが商店街の一角にある事務所。誰もが気軽に集えるサロンとしてビルの一階に開設している。

事務局長の永井佳子さんは「お年寄りを中心とした人の輪の広がりを願って活動してきました。その思いが少しずつ実って、今では、お年寄りにかかわる相談に限らず、いろいろな話題がサロンに寄せられるようになりました。多くの人たちがこのまちを愛して、そして、住み続けてほしい。私たちの実践がその一助になればとの思いを込めて、これからも活動を続けていきます」と話している。

そうぞう

12

2004.9\*No.10

## 編集 後記



●…本誌9号（6月発行）。「性同一性障害」についての特集。自分の性別（からだの性）と心理的な性（心の性）が一致しないため、長い間ひとりで悩み続けてきた性同一性障害者のみなさん。「これからは自分に正直に生きていきたい」との当事者の方々の訴えに、多くの府民のみなさんから理解と共感の声が寄せられました。

●…榎坪琴鶴子さんへのインタビュー。ご自身の体験から映画にかけられる情熱に熱いものを感じました。「人とのかかわりの中で支えあう『自立』」と「介護の原点は対等な人間関係」など、一つひとつの言葉が印象に残りました。

## 戦争

阪南市 小学三年生(当時)  
はしもと  
橋本 あゆみ

戦争の本を読んだ  
戦争で父と母と妹をなくし  
よその家でいっぱいつらい思いをして  
いっぱい泣いてがんばった  
女の子

戦争なんて何のためにするのか  
国がちがうだけで  
にくみあい  
相手をころす  
ころさなければ自分がころされる

勝っても負けても  
大切な大切な命が  
いっぱい消えるだけで  
命より大切なものはないのに

2003年度人権啓発詩・読書感想文募集事業(大阪府・大阪府教育委員会など)の入選作品より

2004(平成16)年9月発行

発行/大阪府企画調整部人権室

〒540-8570 大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351 FAX.06-6944-6616 <http://www.pref.osaka.jp/jinken/>

編集/財団法人大阪府人権協会

〒556-0028 大阪市浪速区久保吉1-6-12 TEL06-6568-2983 FAX.06-6568-2985 <http://www.jinken-osaka.jp>

この情報誌は20,000部作成し、1部あたりの単価は48円です。

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています